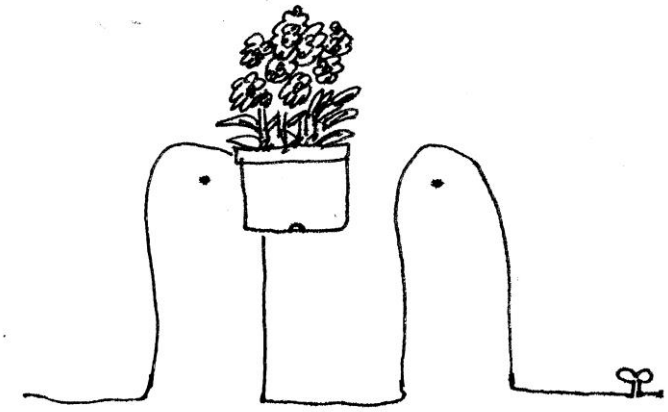
臨界期再開と溶解

溶解をもたらす「私」の器



臨界期再開と溶解 1
１．臨界期と幻覚剤 1
２．私が私であるために変化しなくなる 1
　１）ピンクのバッタ 1
　２）「私」や「あなた」のキャラクター 2
３．臨界期は自己を外部と溶解し変化させる 2
４．精神病の治癒の困難さ 3
　１）病理に気付かない 3
　２）虐待の記憶を消しても学習は残り続ける 3
　３）自分という家族 3
　４）ピラミッド建設の個人化 4
５．回復薬のない地での治癒 4
６．気付きがもたらすもの 5
７．終わりに 6

１．臨界期と幻覚剤

MDMA が PTSD を治癒するのは、アナハタチャクラが開くからだと考えていました。外部との接触を断った感情の門が開かれることにより、内部に留まり続けていた痛みを解放することができるのだろうと。

ですが最近読んだ記事にこのようなことが書かれていました。イボカイン、ケタミン、LSD、ＭＤＭＡ、シロシビンといった幻覚剤は臨界期を再開させる可能性があると。

臨界期というのは学習に適した時期があるだろうという考え方で、その時期には脳の配列の可塑性が高まっている時期だと言います。例えば赤ん坊はより語学を習得し易く、大人はそれ以上の努力が必要になります。赤ん坊の脳はあらゆる音に開かれていて、言語として使われている声の音素を聞き取り、取り込みます。大人の脳は既に学習した言語が使用する音素のみを拾い、他の音素を認識するのは困難になります。

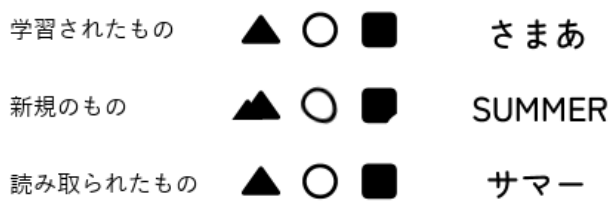


図１　外部の刺激に対し既知の形で解釈するため、新規の情報は切り捨てられるか補完される。

２．私が私であるために変化しなくなる

１）ピンクのバッタ

臨界期というのは、私たちの固有性(だらしない奴、神経質な奴といったキャラクター)を左右する脳の配列が変化しやすい時期なのだろうと思います。

ピンクの花の中で育ったバッタはピンクのバッタになる、という話を聞いたことがあります。茶色のバッタがピンクに変わることがないように、ピンクのバッタもまた茶色や緑に変わることはなく、その色を維持します。

バッタとして生まれたならばバッタとして、ピンクの花の中で育てばピンクのバッタとして、足を折られれば片足のバッタとして生きていく。

人間として生まれた私たちが、幼少期に虐待を経験すれば被虐待者としての変化が生まれます。常に周りを気にし、周りが安全である、という確信がない限り常に不安症に見舞われ、創造性や遊びを発揮する機会が奪われます。成人になり戦場で兵士として戦った人々の一部は PTSD を発症し、日常に戻っても車の音を戦闘機の音と解してベッ

ドの下に逃げ隠れる、といった変化が生じます。
　このようにして幼少期の経験、もしくは強烈な経験は私たちを大きく変化させ、それが持続することで固有性、キャラクターを生み出します。

2）「私」や「あなた」のキャラクター

　このような仕組みがあるのはキャラクターであることを望み、望まれているからだと思います。
　バッタに生まれた私自身が、瞬きの間に人間に変わり、一歩足を踏み出せば樹木になり、次にはまた別の姿になる、ということが瞬間瞬間に繰り返され留まらないのならば、私が私であるというキャラクターは、今の私たちの認識においては希薄なものになってしまいます。少なくとも、変化の順番や変態が、私というキャラクターということになるでしょう。バッタ人間樹木ちゃん、チョウチョ石ころ枯れ葉くん、といったキャラクターです。しかしそれも何の規則性も持続性もなければ、今の私達の認識では、相手が相手であるあることを認識するのは困難になるでしょう。
　私達は相手が相手であり、私が私であることを知るために、固有のキャラクターであることを望んでいるのです。
　私達は身一つでは飛べないことを知り、私達は鳥ではないことを知ります。そうして「病んだ人」は「病」をという自己を決定づけるキャラクターを持ち続けることになるのです。

3．臨界期は自己を外部と溶解し変化させる

　ではなぜ病のキャラクターを持った人が、臨界期の再開によって病のキャラクターを手放すことができるのでしょうか。
　おそらく臨界期は外部との溶解を可能にするからです。
　幼児期に私達が言語を学べるのは、そこに話し声があるからです。いくら臨界期によって扉が開かれたとしても、迎え入れるものがなければその部屋の変化は既にある「私」の範疇に収まります。
　幼児期には扉が開かれていることによって、扉が閉められた後は扉が叩き壊されることによって、私達は外部と接触し、自己の範疇外の変化を迎え入れます。臨界期が開かれた私達は水になり、私達の外部から来る塩と溶け塩水になります。臨界期が閉じられた私達は氷となって最早塩を私の内部に迎え入れることはなくなります。
　ですが炎によって溶かされれば再び外と溶け合うことになります。戦争を経験した「私」はその炎によって溶解し、外部から来るものを「命や記憶や私自身を奪うシグナル」として解する新しい言語を構築し、変化します。「私」は戦争という塩を含んだままの氷となり、日常という外部を受け入れることができず、「接近する大きな音」という影を「子供達が帰って来た合図」ではなく「身体を四散させる爆音」と解し、理性が違うといくら叫んでも身体や精神が否応もなく反応してしまう。

しかしもしそこで溶解が起こったならば、「私」はその爆音と共に子供達を迎え入れることができます。戦場の恐怖やシグナルによって閉じ籠められていた「私」のもとに戦場にいない筈の子供達がやって来るのです。その確かさから「私」は最早戦場にいないのだと知り、「接近する大きな音」の影は「子供達が帰って来た合図」として新しく書き変わるのです。

４．精神病の治癒の困難さ

１）病理に気付かない

こういったことは臨界期の再開という爆発的な変化を経なくとも、治癒されるのはご存知と思います。ですがそれは長い時間と根気が必要です。そもそも自分自身の病理に気付くことさえ難しいことがあります。

例えば幼少期に親からの性虐待を受けた子供は、他者を喜ばせようと相手の性器に触ったり、また大人から求められた時にそれは恋人達がする行為であるという概念もなければ拒絶できるものという意識もなくその身を差し出してしまいます。こういった場合、虐待が明らかであって他者からの支援が受けられる、もしくは自分自身で認識しており病理を自覚することができるのならば、ある程度の指針は見つかることと思います。

ですがしばしば虐待は忘れられたり、記憶が変形していることがあります。ですが忘れたとしても病理は消え去ることはありません。なぜなら虐待は既に学習されてしまったからです。

２）虐待の記憶を消しても学習は残り続ける

性虐待を受けた子供は性行為を「愛する人とする最高のコミュニケーション」ではなく「父親と行う」ものつまり「父親的な存在」と行うものであり「自分の意思とは関係なく」されるものであり、その意図は「保護される為に」行われるものであると学習されます。さらにそれは親子間のコミュニケーションとしても学習されており、親しみを感じるための方法としても学習されます。先の例で相手の性器に触った子供を書きましたが、その子供が先生から「こういうことをするものではないよ。先生は嬉しくない」と教えられると、泣き出してしまったという話でした。

これがどういうことかといえば、通常愛情を感じるレベルで愛情を感じられなくなるということです。その子にとっては性行為が笑顔であり、ハグであり、一緒にゲームをすることであり、他者からの親しみや愛情を感じる方法だったので、性行為の拒絶は親しい他者からも常に無表情を向けられるような孤立感を招くのではないかと考えます。

３）自分という家族

そういったものを引き起こした原因が分からない場合、虐待の推定という作業が必要になります。自分自身の病的な行動や感情、それに結びつく様々な足跡からどういった

虐待があったのか探っていくという作業です。
しかし記憶を忘れたり改竄している場合、強い抑圧が働いていることが多く、まず自分自身が病的であると気付くことさえ困難になる場合があります。自らが望んでそうしているのだと思うために、自分自身の行動を顧みることができなくなるのです。
それは本当に望んでいるからではありません。なぜ自分自身にさえ嘘を吐くのかといえば、私達自身が家族であり大切だからです。例えばあなたが学校で苛められていたとして、「学校楽しかった？」と迎え入れてくれる母親にそれが言えるでしょうか。あるいはやっとできた恋人に、学生時代に事故で死んだ恋人の骨壺が押入れにあるなどと気軽に話すことができるでしょうか。
私たちは相手のことを考えるように、自分自身も同じように考えています。相手の感情を気遣うために隠すように私自身にも隠し、相手との関係や生活が崩れていかないように、また私達自身に嘘を吐きます。

４）ピラミッド建設の個人化

さらにピラミッド建設が標準化された現代において大人に移行すれば生活の維持や人間関係といった様々な雑務が自分自身と腰を据えて向き合う時間を明日へまた彼方へと先延ばしにし、病理は隠れたまま自分自身になり自分自身の選択になります。こういった状態から自分自身の病理に気付くのは非常に困難です。

５．回復薬のない地での治癒

私達が飛びたいと願っても空を飛べないように、脚を失った人は再び歩きたいと願っても、失った足で歩くことはできません。
それは脳の中でも同じで、精神病を抱えれば望みに関わらず反応や選択が行われ、精神病を抱えていなければ存在したその道は絶たれます。こうして脚は誰にも、自分自身にも見えない場所で切り落とされます。
その病は臨界期の再開によって治癒が可能なのではないかと疑問を投げましたが、わが国では幻覚剤を使用するリスクを取るより自殺した方が早いと思う人が多いのは明らかです。
では精神治療先進国や部族の伝統に関わりのない私達は、富や学、権力に関わりのない私達は治癒されることのない病を抱えたまま生きなければならないのでしょうか。私達は何一つ変わることも自覚することもできないまま一生を終えるのでしょうか。
そうではないことを私達は知っています。
私達はほんの小さな出来事から突然に自身が変わる瞬間があることも知っています。ほんの些細な出来事が、自分の全てを変えてしまうことを知っています。
私達は音楽が自分を変えることを知っています。それはある一言の中にも存在し、樅の森の水溜まりにも存在し、降板の釘に打ち付けられる魚の姿にも、何もない瞳の中にさえ存在します。
私はそれを気付きと呼びます。私達はただ気付くことで、大きな変化を自分自身にも

たらすことができるのです。

６．気付きがもたらすもの

ただ気付くことがなぜ私達をそこまで変えてしまうと言えるのでしょうか。

気付きというのは鍵だからです。

例えばある映画があるとします。その映画では飼い猫が突然帰って来なくなり、飼い主の主人公が冬でも窓を開けっ放しにし、一年経っても帰って来ず、生気がなくなり、窓を見ながら一人で泣き出してしまう、というシーンがあったとします。

ここで猫好きの人やペットを愛する人は容易に主人公の気持ちを理解することができます。主人公が寒い日にも窓を開けているのは猫が帰って来るかもしれないからであり、生気がなくなるのは今までどれほど猫から喜びを得ていたかということであり、窓を見て泣いてしまうのは何度もその姿を描いては存在しないということを繰り返した悲しみと最早現れることはないのだという感情が溢れて涙したのだというように、簡単に物語の鍵を開けその世界に入ることができるのです。

ですが猫が嫌いな人やペットの価値を理解できない人はその映画の意味が分かりません。寒い日に窓を開けずとも監視カメラを仕掛ければいいのにとか、元気がないふりをして同情を得たいからなのかとか、泣くなんて大げさだとか、皆なぜこんなものを涙しながら見るのだとわけがわからなくなります。「猫を愛している」というある人達にとっては簡単なその鍵を開けることができず、物語の中に入ることができないのです。

ある有名な映画があります。その映画では主人公がただ同じ人を愛し続けますが、やはりある人には不可解であり、ある人には偽善的であり、またある人には主人公が相手に弄ばれていると感じさせます。しかしある人には現実にも存在する本当の愛を描いた話だと感じさせます。それは主人公がどういう行動をしているか、どうしてその人を愛しはじめたのか、主人公が誰を大切な友達としているか、そういった様々な描写から鍵を作っていき、そうしてできたその鍵で物語の扉を開けて、物語に流れている美しい川の流れを見ることができたからです。

歌の詩も同様にある人にとっては全く意味がない言葉の羅列ですが、別の人にとっては言い難い感動をもたらすものであり、また別の人にとっては大切なメッセージを含んだ手紙として読むこともできます。

こういった鍵は私達が現実の経験によって既に作り上げていたものありますが、多くの場合その扉を開ける鍵がないことの方が多いのではないでしょうか。だからこそ私達はその状況や行動や言葉を観察し暗号を解くように鍵を作っていきます。そして不可解だった閉じられた扉の中にあるものを見ることができます。

私達の元には私達が必要とするメッセージが雨や陽のように日々降り注いでいます。リチャード・バックが本を開けばそこに必要なメッセージが書かれていると書いたように、手を伸ばしたものや、感じたものの中に「私」を変える何かが存在しています。それを何度も噛み含めることで感覚を越えて気付くことができます。それは明確に言葉で表される必要もなく、ただ確信となって「私」を書き変えるのです。

７．終わりに

六〇年代に解体された瓦礫の下で変化の扉は脈々と受け継がれ、今の成果となり、脳に直接変化もたらす技術さえも生まれました。
私達の元へその変化の波が来るのは最も遅いだろうと確信しますが、代わりに私達は瞳の中にそれを見るでしょう。私達は溶けあう秘術を自分の内部に持つことになるだろうと期待しています。